

Design visions series

Service Learning by Engaging Older Adults: Transforming Engineering Education, Student Attitudes, and the Self-Efficacy of Elder Neighbors

日時：2014.05.19 (Mon)

場所：吉田キャンパス 総合2号館 ケーススタディルーム

講演者：Associate Professor Caitrin Lynch, Olin College of Engineering

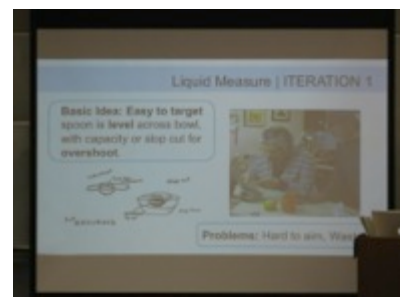
本講演ではオーリン工科大学准教授、Caitrin Lynch氏をお招きし、氏が4年ほど前から大学で取り組まれている授業、Engineering for Humanity, an interdisciplinary engineering design and anthropology courseについてご紹介頂いた。講演ではオーリン大学の簡単な説明の後、本題であるコースの話へと進んだ。オーリンとは、比較的新しいエンジニアリングを専門とする超エリートカレッジである。



Lynch氏はスリランカにおける文化人類学研究を長年行ってきたが、近年は米国における高齢者の仕事を調査している。ちょうど、『高齢者が働くこと』(原題: Retirement on the Line)という翻訳が出たところである。米国のある針を製造する中小企業Vita Needleが高齢者を積極的に雇うことで成功している。96歳の高齢者も若い従業員と一緒に工場で働いている。Lynch氏は今の我々の社会では、「高齢者が人として扱われない」という。例えば、レストランに行くと従業員は高齢者を無視し、若い客に話しかけ、若い客が翻訳することが多いという。高齢者は生産性が悪いと思われる。しかし、Vita Needleでは、生産性は低いかもしれないが、働く高齢者が目を輝かせて意欲的に働くこと、それにより他の従業員が刺激を受けること、一方で給料はそれほど必要としていないためコストを押えられることなどが議論された。例えば給料を必要としていなくても、働いて給料を貰うということは、自分が社会で必要とされているという実感を伴う。

この研究に関連して、Engineering for Humanityという授業では、学生が高齢者を対象にエンジニアリングを行う。このコースは主にオーリン大の一年目の学生を対象（近隣の提携カレッジからのバックグラウンドの異なる学生も参加）に、初級のデザイン実習として、自分たちが生きる社会にとって身近な存在である高齢者の日常の問題を解決するユーザー中心デザインを模索するPBLである。コースは

Immerse & Frame, Imagine, Buildの3つの段階から成り、それぞれのフェーズに関するデザイン活動、高齢者とのインタラクション、ゲスト/フィールドワークの3項目でカテゴライズされた活動内容によって整理されていた。それぞれの過程をご説明頂くのと同時に、このコースから生まれた学生プロジェクトの具体的な成果物についてもいくつか写真付きでご紹介いただいた。工学系ということもあり、





基本的にはプロダクトが多かったが、中でも黄斑変性（視覚が歪んだり欠損する）と緑内障を患う女性のためのまな板は、パートナーとのインタラクションや観察の賜物であり、大変印象的であった。

この授業を通して、学生は自らの体験を振り返る。例えば、自分の祖父を自分がどう見ていたのか、そのとき祖父はどう感じただろうということに思いをめぐらす。そして、具体的なモノやツールをデザインすることにより、生活の変化を具体形に捉えることのできる。高齢者自身もデザインに貢献することで、目を輝かせる。学生にとっても、高齢者にとっても、これまでの自分から抜け出す契機となったと考えられる。

本講演では授業の具体的な事例紹介を通じて、授業の目的や進め方、学生や授業のパートナーである高齢者の反応など、コースを運営している実施者側からの視点で語られることが多かった。講演後の質疑応答でも授業を運営する上でのより実践的な内容に関する質問が飛び、今後の参考となる内容であった。

参考: ケイトリン・リンチ『高齢者が働くということ』ダイヤモンド社。

